

鍛冶屋の技が 人の暮らしを暖める



【新】秋田逍遙

第33回

文・写真／津島修三

(最終回)

能代市二ツ井町で今の時代には珍しい鍛冶屋を営む安保家は、現当主の安保誠喜さん(57)で9代目となる鍛冶屋一筋の家柄だ。

安保鍛冶屋の初代は刀鍛冶で、粕毛村(現藤里町粕毛)で肝いり(村の長)だった安保家の名字を拝領し、村内に鍛冶屋を構えたと伝えられている。きみまち阪(現能代市二ツ井町)近くを流れる藤琴川のほとりにあった加護山精錬所(江戸時代から明治中期まで存続し、阿仁鉱山や太良鉱山から舟運で運ばれてきた鉱石から銀銅、鉛を生産していた)で専属の鍛冶屋をしていた時期もあったという。

昭和6(1931)年には、きみまち阪の米代川対岸(現在の能代市二ツ井町荷上場上中島)に天神貯木場が開設され、秋田杉の一大集積地になった。周辺の山々から切り出された秋田杉の丸太はここで筏組みされて米代

川を下り、河口の木都能代に運ばれた。貯木場ができたことで鳶口(木を引き寄せるのに使う道具)の需要も一層旺盛になり、鍛冶屋の仕事も繁忙を極めたという。

今、安保鍛冶屋では長年培ってきた鍛冶の技を生かして、薪ストーブ作りに入力を入れている。これがなかなかの評判で、平均して年30台のペースで40年ほど作り続けているというから、安保式の薪ストーブは千台余りが世に出回っていることになる。「職人のこだわりで、丈夫に作っているから30年以上は持つ」と安保さん。まさに「一生モノ」だ。

安保鍛冶屋が薪ストーブ作りを手掛けるきっかけになったのが、昭和47(1972)年7月豪雨。米代川や藤琴川はこの時の集中豪雨で氾濫して地域に大きな被害をもたらした。浸水家庭からは大量のガスボンベが流出。この時の廃棄ボンベを加工して作ったのが、安保式薪ストーブの原点だ。これが口コミで評判になり、宣伝しなくてももほとんど買い手がつくようになった。今はボンベの軽量化で板厚が薄くなってきたおり、自分で納得のいくストーブを製作するために、十分な板厚の一枚鉄板から作っている。鍛冶屋の技が光る一生モノの薪ストーブだ。